心の薬、お売りします。

彩暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
心の薬、お売りします。

【Ｎコード】
Ｎ５９９８Ｄ

【作者名】
彩暁

【あらすじ】
いじめ、虐待、自殺・・・。人々の問題が耐えないこの世の中。
そんな世界を救うため、『心の薬』を売る不思議なお店がありました・・・・・・。

FILE0：プロローグ

生きることに疲れた。なんて思ったことある人は、結構いるんじゃないかと思う。

というか、全く疲れず苦労せず生きられる人なんているわけがない。

ただ、疲労感だけならまだしも、心に傷がついた人なんてのも沢山いるはず。

「心の傷」は、そう簡単に治るものじゃないけれど、

みんな、その傷を確実に治すことのできる、「特効薬」を持っている。

でも、押入れの救急箱に入っている傷薬みたいに、すぐ取り出せるわけではない。

目には見えないのだから。

置き場所なんて、誰も知らないのだから。

傷を癒すには、薬（それ）を見つける必要がある。

薬（それ）は、どこにあるかは分からないけれど、見つけようとすればすぐ見つかるものだ。

だいたいは、自らのすぐ近くにあるものだったりする。灯台下暗しということだ。

こんなことをゴチャゴチャ言っている私だけど、実際自分も傷ついていたりする。

そして、まだ特効薬をみつけてなかったりする。

今現在私の心はつぎはぎだらけで、

細い細い、今にもちぎれそうなくらいの糸でどうにか繋がれている。

そんな時、街角で見つけた、不思議なお店があった。

看板には、こんなことが書かれてあった。

「心の薬、お売りします。」

ＦＩＬＥ１：真夜中のメール

限界かも・・・。

ピンク色のシーツをしいたベッドに横たわって、心の中でつぶやいた。

生きていくの、もう、無理かもなぁ・・。

二宮結衣（にのみやゆい）。１６歳、現役女子高校生。

只今、絶望の真っ只中。

理由はよくある話。

成績微妙。運動神経人並み以下。性格は暗くて引っ込み思案。ｅｔｘ・・・

いじめられている・一人暮らしというおまけつき。

なんでそうなのか。なんで私なのか。

そんなの分からない。

私はそれに反抗する力さえないから。

変わりたいのに。変わらないといけないってこと、分かってるのに。

白い天井を見つめて考える。

あの世に行ったら、今より楽になるのかな・・。

頭の中に、急にはっきりと浮かんできた「死」の文字。

目を閉じて、いそいでかき消した。

それは、駄目・・。せっかくもらった命だもの・・。

ゆっくりとベッドから起き上がる。時刻は、ＡＭ１：００。

眠れない。

机の上のパソコンに電源を入れる。

『ヴィー・・・・』というかすかな音がなる。

やがて、画面からの光に、部屋中がほんのりと照らされた。

デスクトップの右端の、「Ｅメール」をダブルクリックした。

こんな夜中に、メールが届くことなんてないだろうけれど。

メールを送ってくるのなんて、他県に住んでいる両親くらいだけど。

深く溜息をついた。

しばらくして、画面が表示される。

受信箱に、１つ、メールが届いていた。見たこともない、アドレスから。

「誰・・？」

不安が広がる。迷惑メールだろうか。

乾いた唇に、舌をゆっくり這わせ、湿らせる。

アイコンを、未読の「件名なし」の上にあわせる。

二回瞬きをし、人差し指を二回うごかす。

ダブルクリック。

画面上に、メール内容が表示された。

『傷ついてはいませんか？心の薬、お売りします。
×××－××××－×××。』

広告のキャッチコピーのような文章と、電話番号が書かれてあった。

「何コレ・・。なんかのセールス？」

電話をかけた途端に、おじさんが早口で商品説明を始めたりするのだろうか。

心の薬。

どう考えても不審だろう。

「くだらない・・。どうせただのカウンセリングとかだったりするんじゃないの・・？」

そう思いながらも、少しばかりか、そのメールを信じたいと思ってもいた。

メモ用紙に、電話番号を控える。

瞼が重くなってきた。丁度いい具合の眠気だ。

パソコンの電源を切る。　部屋に再び静粛が訪れた。

ベッドの上に横になる。静かに目を閉じて・・・。

その日は、そのまま眠った。

FILE2：学校

おはよう！　　おはよう！ねぇ宿題やった？　　やっばい、全然やってないよー。

冬の冷たい風が吹く中で、校舎の中では沢山の若い声が響いていた。

いつも通り一人で登校してきた。

おそるおそる下駄箱を開ける。

上履きの中には画鋲が６つ入っていた。

（はあ・・。またか・・・。）

靴を逆さにして、画鋲を取り出す。プラスチックの画鋲ケースにバラバラと落とす。

上履きを履いて廊下を歩く。視線は自然と下を向いてしまう。

教室の前で足を止めた。いつも通り、入るのを少し躊躇(ためら)う。

目を閉じて心を落ち着かせ、戸を開いた。

１年３組の教室は、賑やかな話し声で満ちていた。

クラスメイト達の笑い声の中を潜り抜け、窓際の１番後ろにある、自分の席に向かった。

机と椅子は、なかった。

また誰かがどこかへ勝手に移動させたのだろう。

（よくやるよ・・。今日はどこへ隠したのかな・・。）

深い深い溜息をつく。

斜め前から、クスクスと笑う声が聞こえた。

目だけを軽く上げる。３人組の女子生徒がこちらを見て笑っていた。

「恒例の席探しだよぉ。」

「さぁ、今日はどこにあるかなぁ??」

「探しておいで、二宮ちゃん！」

グロスをぬってあるのであろう、桃色の光を帯びた唇から、

悪意のこもった言葉が零れ落ちてくる。

溢れ出しそうになった涙を押し込めて、鞄を持ったまま、机を探しに教室を出た。

FILE3：痛み

机と椅子は、ゴミ捨て場に置かれていた。

どうしていじめる側は、ただの嫌がらせのために、面倒なこともするのだろうか。

3階にある1年3組の教室から、別校舎の裏にあるゴミ捨て場まで机を運ぶなんて面倒なことも。

わざわざそんな手間をかけてまで、人を陥れたいのだろうか・・・。

「・・・ゃ・・・みや・・・二宮！！」

数学担当の５０歳の男性教師の声が教室に響く。

「ぇ・・・。あ。はい・・・。」

ぼーっとしていた。慌てて返事をする。

「どうした？ぼーっとして。気分悪いのか？」

先生が、優しそうな眼鏡をかけた顔を、心配そうに歪ませた。

「ぃ・・・いえ・・・。大丈夫です・・・。」

「そうか。調子悪かったらすぐ言えよ。」

「はい・・・。」

「よし。じゃあ授業続けるぞ。教科書８８ページの例題は・・・。」

軽く頷いてから、再びチョークを黒板に走らせ始めた。

（体は健康だけどな・・。心はもう調子悪いどころじゃないよ・・・。）

ただでさえ微妙な成績が、最近更に不振なのは、このせい。

時が経つにつれ、考え事をする時間が増えていく・・・。

授業に集中できなくなっていく・・・。

「嫌なら、誰かに相談すればいい。」なんて、思うでしょう？

でもね、いじめられていることを相談するのって、結構勇気がいることなんだ。

特に、私みたいに引っ込み思案だったらね・・・。

キーンコーンカーンコーン・・・♪

聞き飽きたチャイムが鳴り響く。

生徒たちは、がたがたと音をさせながら道具を片付け始める。

「ああ。終わっちゃったな。じゃあ、残りの問題は次までの宿題にするか。」

えぇ～。　多いよ～。　次って明日じゃん！

と、たくさんの文句が行き交う。

「今日の復習問題だけだから簡単だぞ。ちゃんとやって来いよ。」

最後に言って、先生は教室から出て行った。「ありがとうございました。」は無しだ。

（また集中できなかったな・・・。）

また一つ、溜息をつく。

授業の道具を片付けようとしていると、さっき出て行った先生が戸から顔を出した。

「二宮！ちょっと来てくれるか？用があるんだが。」

「え・・・？なんですか？」

先生は小さく手招きをして、顔を引っ込めた。

そちらへ行こうと、席から立つ。

一歩踏み出すと同時に、足の前に誰かの足が出された。

「えっっ・・・？きゃっ！！」

引っ掛かって転んだ。

「痛・・・・。」

起き上がって振り向くと、数人の男子がニヤついていた。

「あ、ごっめ～ん。足が滑っちゃったよ～。」

一人の男子が、からかうように言う。

かなり頭に来た。

でも、反抗すれば、またいじめが酷くなるにちがいない・・・。

そう思い、無視して先生のいる方へ向かった。　後ろから笑い声が聞こえる。

左足首がズキズキと痛む。　捻(ひね)ったのだろう。

廊下に出ると、先生はこちらを見て、優しそうな顔でほほ笑んだ。

「さっき見たら転んでたけど・・大丈夫か？怪我とかはないか？」

引っ掛けられたところは見ていないようだった。

「あ・・・。えっと、足首を捻ったみたいです。」

「保健室に行くか？」

「でも先生・・・用って・・・？」

「あぁ、それなら放課後でいい。とりあえず保健室に行こう。」

先生の小さな気遣いがとても嬉しかった。

「はい・・・。」

『用』は後回しにして、先生に支えられながら保健室に向かった。

足首の痛みは、少しずつ酷くなっていくようだった。

そして・・・心の痛みも。

FILE3：痛み（後書き）

文章力がなくてごめんなさいっ！（。・ε・。）
頑張って執筆中なので、ご感想頂ければ幸いです。

ＦＩＬＥ４：電話

足首は、軽い捻挫だった。

先生は、最近の私の成績不振を心配していたみたいで、今日の話はそれだった。

現在時刻は１７：５０。美術部の活動を終えて、帰りの電車に乗っている。

ドアの前に立ち、流れていく景色を見つめていた。

少し離れたところに、パソコン用品店の看板が見えた。ふと、あのメールを思い出す。

『心の薬、お売りします。』

あれは、ただの迷惑メール・・・？それとも・・・。

ブレザーの胸ポケットから、薄桃色のメモ用紙を取り出す。

×××－×××－×××

どうすればいいのかな・・・・。

電車が止まる。開いたドアから、細い足をホームへ踏み出した。

人ごみの中、携帯電話に、６つの数字を並べる。通話ボタンを押す前に躊躇った。

大した悩みじゃないはずなのに・・・もっと酷いことされてる人だっているのに・・・。

それでも、孤独な気持ちからどうしても抜け出したかった。

すがるような気持ちで、通話ボタンを押す。

トゥルルルルル・・・トゥルルルルル・・・カチャッ

『もしもし。はじめまして、二宮さん。』

「えっ・・・・・？」

突然、若い男の美しい声が呼びかけてきた。深い、どこまでも吸い込まれてしまいそうな声。

『脱出したいのですね？傷ついた心から・・・。』

「はい・・・。あの・・どうして私の名前を・・・？」

当たり前の単純な質問をする。男はふふっと軽く笑った。

『メール、ご覧になったんですね。どうして知っているかはいえません。』

そういう男の声の後ろで、小さな子供が遊んでいるような音と声がきこえた。

「あの・・・。」

『はい。なんでしょう。』

「いえ・・やっぱいいです。あの・・心の薬って一体・・？」

『心の薬、ですか？そのままです。心の傷、病を癒すためのものです。』

「それって・・・、普通の錠剤とかみたいなものなんですか？」

『それは来てからのお楽しみ・・・。』

不思議な感覚だった。男の美しい声を聞いていると、心が落ち着いてくるのだ。

『それでは、お待ちしておりますよ。二宮さん・・・。』

「あっ・・・あの、お店の場所とかは・・・？」

『大丈夫。すぐ見つかりますよ。あなたなら、きっとすぐに。』

そういったあと、失礼いたしますと言って、電話は切れた。

ツー・ツー・ツー・・・・

「どうやってみつけろっていうの・・・？」

私がその不思議なお店の看板を見つけたのは、その三日後だった。

FILE5：エスカレート

朝。あの電話からもう3日がたつ。

地図もない、目印も教えてくれなかったため、街を歩きながら探しても店は見つからない。

ネットで調べてみても、何の情報も見つからず、結衣は探すのを諦めようとしていた。

何も見つからず、解決しないまま、またいつも通り憂鬱な一日が始まる・・・。

爽やかに空は晴れ渡っている。小鳥も枝の上で囀(さえず)っている。

なのに、今日は嫌な予感がする。

なにか、悪いことが起きそうな、異様な違和感が・・・。

一歩一歩、確実に学校に近づいていく。

（・・・このまま道がずっと続けばいいのに・・・。）

そんなことを考えているうちに、門をくぐった。

周りからは楽しそうにはしゃぐ女子の声や、ふざけあう男子の声、「おはよう」を連発する体育教師の声がきこえる。

（私も、高校入学したらあんな風になりたいって思って中学卒業し

たんだよなぁ・・・。）

性格や今まで過ごしてきた環境のせいか、勇気が出ず結局はじめから失敗した目標。

（このままで3年間過ごすことになったりして・・・まさかね・・。それまでには・・・。）

靴箱で、いつもの様に深呼吸をしてロッカーを開ける。

学校内で履くはずの上履きがなかった。今までは画鋲が限度だったのだが・・・。

とりあえず靴を置き、玄関を探した。

こういうときにベタな場合だとゴミ箱にあるのだが、そこにはなかった。

予鈴まで時間があったので、焼却炉まで行ってみたが、そこにもなく、

思い当たるところを探しているうちに時間がなくなってしまった。

仕方がないので、体育館用の靴を履いて教室に行く。

机はあった。しかしホッとしたのも束の間、机の上に何かおかれていた。

少し近くまで行くと、それが何かわかった。ボロボロに傷つけられたそれは、

上履き。探していたはずの結衣の上履きだった。

ギリギリ履けないくらいまで刃物で切り裂かれ、ボロボロになっている。

そしてその下には、同様にボロボロのノートが2冊あった。どちらも結衣のものだ。

（嘘・・・。今まではこんなことはされなかったのに・・・。）

小学校時代は何もなく、中学校時代は言葉のイジメ。

高校に入ってからも、私物を傷つけられることはなかった。今回が初めてだ。

呆然としていると、髪を茶色に染めたメイクの濃い女子生徒が目の前に立つ。

「どお？すっごく素敵でしょ？二宮さんにぴったりだと思うの。気に入ってくれたぁ？」

クラスメイト全員が注目している。とりあえずは無視をすることにして、

ボロボロの上履きと、ノートを片付けようとした。

その手を、横から伸びてきた手が叩く。上履きとノートが音を立てて落ちた。

「せっかくあんたに似合うようにしてあげたんだから、履きなさいよ。」

にやつきながらもう一人の女子生徒が言う。

結衣は唇をかみ締めて、落ちたノートを机の中にしまう。

そして、数人に急かされながら、傷だらけの上履きに足を入れた。

「まじで履いた！！」

周りにいた女子が手を叩いて笑う。

クラスメイトの中には、無視しているもの、笑っているもの、気の毒そうな顔をしているもの

と、さまざまな表情の人がいたが、誰一人止めようとはしない。

（やっぱりみんなイジメの獲物（たーげっと）が自分になるのが嫌なんだ・・・。）

結衣がずっと下を向いていると、チッと舌打ちが聞こえた。

最初に話しかけてきた女子生徒がしたのだ。

「なんか言えよっ！」

勢いよく結衣の肩をつかんで突き飛ばす。硬くつめたい床にしりもちをついた。

「痛っ・・・・・・！」

じんじんと痛みが伝わる。それで結衣はしばらく立てなかった。

「こいつさぁ、いっつもほとんど喋んないよねえ。」

「せっかく話しかけてやってんのに、失礼なんじゃないの？」

別の女子生徒が口々に言いながら、転んだ結衣に近づいてくる。

「どうする？まだ時間ちょっとあるし、ちょっといじめちゃう？」

「あぁ、いいかも！じゃあとりあえず・・・。」

一人の女子が結衣の顔の方に手を伸ばしてくる。

「や・・・・・・。」

そのまま長い爪を立てて結衣の顔をつかもうとする。

マニキュアで桃色に彩られた爪が軽く頬にあたった。

「やめてっ！！」

結衣はその女子生徒の手を強くはじいた。

女子生徒は驚きで目を見開く。そして結衣自身も・・・。

（うそ・・・。私今なにを・・・・？）

生まれて初めてしたいじめっ子への抵抗。結衣本人にも予想外だった。

再び呆然としていると、次は乱暴に制服の襟を掴まれ無理矢理立たされた。

「なーんだ。無能人間でも一応抵抗はできるんだ？」

苛立ちのこもった笑顔を浮かべ、結衣をののしる。

「チョーシのってんじゃねーよ！」

女子生徒は、結衣の頬を殴ろうと思い切り腕を振り上げた。

とっさに目を閉じる。

・・・・・しかし、何秒たっても頬に衝撃は走らなかった。

（・・・・・・・・・・・・・？）

ゆっくりと目を開けると、女子生徒はさっきと変わらず腕を振り上げたままだった。

ただ、違うのは、その腕を誰かの手が握って止めていたことだった。

女子生徒は、「離せよ！」といいながら逃げ出そうとしていた。

それに対して表情ひとつ変えずに女子生徒を止めているのは、一人の男子生徒だった。

FILE6：高瀬　心

「いい加減にしとけば？」

女子生徒は相変わらず腕を振って逃れようとしている。

しかし、男子生徒はその腕を離そうとはしない。

男子生徒は、結衣とは席がかなり離れている。

さっきまで、その離れた席に座って本を読んでいた。

いつの間に移動したのだろうか。

「二宮もさ、今抵抗できたんじゃん。なんで今まで黙ってたんだよ。」

言葉遣いはきついが、声は結衣が今まで聞いた中で一番優しかった。

高瀬（たかせ）　心（こころ）。それが彼の名前だった。

入学式で初めて名前を知ったときは、結衣も、不思議な名前だなと思った。

黒髪のショート。すらりと細い長身。切れ長の眼。ルックスはまず満点だ。

普段は騒いだりするタイプでなく、静かに読書をしているか、ぼーっとしている。

スポーツ万能、成績優秀の完全超人タイプで、人気も高い。
だが、結衣は一切喋ったこともなく、よくわからない存在だった。
なぜ突然助けてくれたのか分からなくて、結衣は呆然としていた。
ふーっと、ため息が聞こえ、高瀬の人差し指が結衣を指す。
「あと、お前見つけるの遅い。今日はちゃんと見つけろよ。」
「え・・・・・・・・・？」
それだけ言って、高瀬は女子生徒の腕をやっと離し、自分の席に戻っていった。
「っんだよあいつ・・・・・。」
そういいながら女子生徒も席に戻っていった。
キーンコーンカーンコーン・・・♪
朝のホームルーム開始を告げるチャイムが鳴る。
全員が席に戻っていくと同時に、教室の戸が開けられた。
「ホームルームはじめるぞー。みんな席に着きなさーい。」
結衣は急いでぼろぼろのノートを片付ける。

担任の、女性教師が入ってきた。みんなに慕われている、友達のような先生だ。

先生は、今日の連絡事項や、時間の変更などをいつもどおりに話していく。

結衣は、ボロボロの上履きに足を入れたまま、話を聞いていた。

途中、前のほうに座っている高瀬を見ると、高瀬も結衣の方を向いていた。

結衣はあわてて目をそらしたが、高瀬はずっと結衣のほうを見ている。

（何・・・・？というか・・・『見つけるの遅い』って何のこと・・・？）

高瀬の視線を感じながら、考えていると、ひとつ考えが浮かんだ。

（まさか、あの店のこと？）

「心の薬」を売っているというあの店。

確かに結衣はまだその店を見つけていない。

高瀬の名前も、「心」。何か関わっているようにも思える。

しばらくすると、高瀬は視線を前に戻した。

―休み時間―

「ねぇ。」

結衣が一人で本を読んでいると、高瀬が声をかけてきた。

「何・・・・・？」

「あんたんとこにも来たの？あのメール。」

「え？」

「『心の薬』のメールだよ。」

どうやら、高瀬にもあのメールが来たようだ。

つまり、店自体に深い関係があるわけではないということだろうか・・・。

「来た・・・けど。」

「そうか。」

「あの・・高瀬君の所にも来たの？」

結衣がそう質問すると、高瀬は少し考えるように頭を傾けた。

「・・・・いつも通ってる道、もう少し観察してみな。」

結衣の質問には答えず、ただそれだけ言って高瀬は戻っていった。

「いつも通ってる道・・・・。」

FILE7：店探し

帰り道、結衣は高瀬に言われた通り、『いつも通ってる道』をもっとよく観察することにした。

いつも通ってる道といえば、通学路が真っ先に思いつく。

ちょうど学校から駅に行くまでに繁華街があるので、そこを注意してみることにした。

今日は、部活がない。

ホームルームが終わると、結衣はすぐに荷物を持って教室を出た。

高瀬は、急いで出て行った結衣を横目で見つめたあと、暫く近くの席の友達と話していた。

―靴箱

靴を履き替えようと、上履きを脱ぐ。結衣は傷だらけの上履きを見て、今朝のことを思い出した。

・・・・はー・・・・・・。

小さくため息をついて、靴を履き替えた。

―街

周りから聞こえるゲームセンターの騒がしい音や、呼び込みの店員の声が結衣には耳障りだった。

入学当時は繁華街などほぼ来たことが少なく、今よりもこの音がうるさいと感じていた。

話し声であふれた人混みの中を、それぞれの店をよく観察しながらゆっくり歩く。

もうだいぶ見慣れた店の看板ばかりで、目的の建物らしきものは見つからない。

「この街じゃないのかな・・・？」

そうつぶやくと同時に、結衣の肩に前から来た柄の悪い男の腕がぶつかった。

「きゃっ・・・。」

黒いジャケットでキャップを深くかぶり、ネックレスやブレスレットをじゃらじゃらとならしている。

髪は明るい茶色で、いかにも不良っぽいかっこうだった。

「いってぇーな。どこみて歩いてんだよ。」

「ご・・ごめんなさい。」

結衣はすぐに頭を下げた。

顔をあげると同時に、男は結衣の顔を覗き込んできた。
「へぇー。けっこうカワイイじゃん。」
にやにやしながら言う。
「えっ・・・・・・。」
「俺タイプやな。ま、ぶつかってきたんだから、ちょっと付き合えよ。」
男は結衣の腕をつかんで連れて行こうとする。
すぐに結衣は抵抗した。
「いやですっ・・・・！」
男が引っ張るのと逆の方向に力を加える。
男は意地悪そうに微笑みながら、更に力を強める。
「いいから来いよ。ちょっと遊ぶだけだって。」
「離してくださいっ！！！」
結衣は抵抗を続ける。男の手をふりほどこうと必死で腕を振る。
男は軽く舌打ちをした。結衣の耳元に顔を近づける。
「店探してるんだろ。」
結衣は少しだけ目を見開く。

「店・・・・・・・？」

「ついて来い。」

男はもう一度結衣の腕を軽く引いた。

次は、結衣もおとなしく歩いた。

（なんでこんなに知ってる人がいっぱいいるんだろ・・・・。）

連れて行かれたのは、ゲームセンターだった。

「は・・・・？」

（ゲーセン・・・？なんで？）

ぽかんとしていると、男がまた顔を覗き込んできた。

「何？もしかして疑ってる？」

片眉だけピクリと動かしてから男が笑う。

（・・・そういえば、なんでこの人私にからむ真似事までしたの？
何のために・・・。）

「やっぱ私帰りますっ！」

方向転換して、戻ろうとすると、すかさず男の大きな手で肩をつかまれた。

「だーかーらー・・・。ここで本当にあってるんだって。」

「じゃあ普通につれてきてくれればいいじゃないですか。なんでからむ真似まで・・・・。」

「ちょっと驚かせたかっただけだよ。普通はつまんないだろ？」

男の手は、結衣の小さな体を軽く引き寄せた。

そのまま、ゲームセンターの中へ入っていく。

目の前の景色が、結衣には突然ゆがんだように見えたのは、そのときだった。

ＦＩＬＥ８：薬屋

一瞬ゲームセンターの中の景色がゆがみ、結衣と男はそのゆがみに飲み込まれた。

思わず目をつぶっていた結衣の肩を、男の手が叩く。

「ほら、ついたよ。お探しの場所。」

結衣はゆっくりと目を開ける。

そこは、ゲームセンターなどではなかった。

薄暗い、店のような・・・・。

周りには一面、大きな棚があり、そこには分厚い本や、液体や花の入ったビンが並べてある。

目の前にはカウンター。銀色の鈴が置いてあり、ちょうどその真上に看板があった。

木で作られた、黒い看板に書かれた白い文字。

Ｍｅｄｉｃｉｎｅ　ｏｆ　ｍｉｎｄ

「心の薬・・・・・・・・。」

どうやら、ここが「心の薬」屋のようだ。

店の中をしきりに見回す結衣の横にいた男は、突然目の前のカウンターに置いてある銀色の鈴を鳴らした。使用人を呼ぶような、かわいらしい鈴だ。

よく響く、美しい音だった。
結衣はその音に聞き惚れて、ため息をもらしていた。
聞き覚えのある声がきこえたのは、その直後だった。
「いらっしゃいませ。」
3日前、電話越しに聞いたあのきれいな声。
その声の先には、黒いローブを羽織った男がいた。肩には黒猫が乗っている。
しかし、結衣はその顔に見覚えがあった。
やさしい微笑を浮かべるその顔は―・・・・
「高瀬・・・くん?」
「はい。高瀬です。こんにちは、二宮さん。」
そういって高瀬はまた微笑む。
教室での雰囲気と明らかに違う。
「え・・え・・・高瀬くん・・?あれ・・・・?性格がなんか違う・・・?あれ・・?」
「おいおい混乱してるじゃんか。この子勘違いしてんじゃないのか?高瀬。」
「そうですね。ちゃんと説明してあげたんですか?神川(かみかわ)さん。」

「いんや。まだ。」

神川と呼ばれた男は、かぶっていた帽子をとった。
性格に似合った、軽そうな顔をしていた。
あごにひげを生やしている。２７、８歳といったところか。

結衣は、突然性格や口調の変わった高瀬にいまだ混乱していた。

「兄貴！！！」

また聞き覚えのある声がして、カウンターの奥の、さっき高瀬の出てきたドアが開いた。

結衣と同じ校章の見える制服を着た男―・・・・。

高瀬だった。

「え・・・・・・。」

結衣はますます混乱する。

「たっ・・・・高瀬君が・・・二人・・・・・・・・・。」

結衣の体が眩暈でも起こしたようにふらりと揺れ、倒れた。

「おい！大丈夫かよ・・・・。」

「奥に運んであげましょう。少し休んだほうがいい。」

「俺、なんかしたか・・・？」

ダブル高瀬と神川は、結衣と、鞄を運んで奥の部屋へと入っていった。

いつの間にか高瀬の肩から降りた黒猫が、銀色の鈴を小さく鳴らしながらカウンターを横切った。

FILE9：はじめまして

夢を見た。

広い草原だった。

その中に、制服の人影がひとつ、たたずんでいる。

結衣は、人影に駆け寄り、彼の名を呼んだ。

『高瀬君！』

名を呼ばれた人影は、ふっと結衣を振り向き、笑う。

『二宮・・・・』

結衣は高瀬の目の前まで歩み寄って、長身の彼を見上げた。

『高瀬君・・高瀬君は一人だけだよね。二人なんて・・夢だよね』

あの薄暗い店の中で見た二人の高瀬。

あんなの夢に決まってる。

結衣の質問に、高瀬はくすっと笑った。

『馬鹿だなぁ、二宮』

『・・だよね。こんな質問・・』

『だろ？俺は二人いるの、みたじゃねえかお前』

（そう・・・だよね。高瀬君は二人・・・）

『・・ぇ？』

（二人・・・・・？）

『『俺は二人いるんだよ。二宮』』

突然二つの声が重なった。

少しの歪も生じない、完全な声のシンクロ。

気づけば、そこは草原でなく、荒れまくった岩地だった。

結衣の立つ場所のすぐ後ろには、崖。

『ひっ・・・・』

崖の下に見える荒れ狂った海に恐怖を感じ、短い悲鳴を上げる。

その結衣の肩に、骨ばった大きな手が触れた。

『二宮』

『え』

優しく触れたはずのその手は、次の瞬間、結衣を強い力で押した。

バランスを崩した結衣の体が、荒れた海へと落ちていく―・・・

『きゃぁあぁぁぁぁぁ！！！！！！』

「・・・・・・のみや・・・二宮！」

目を開けると、顔の前に三つの男の顔があった。

そのうち一人は、結衣を街で連れ去った、神川というらしい男。

あと二人は―・・・

「高瀬・・くん・・」

結衣のつぶやきに、二人は顔を見合わせて答えた。

「説明いるほど似てんのか？」

と制服版高瀬。

「どうやら必要なようなので」

とローブ版高瀬。

二人の高瀬が、目が覚めたばかりでぼーっとしている結衣に向いた。

「二宮」

と結衣の名を呼んだのは制服を着た高瀬。

「・・・・はぃ」

「混乱すんな。とりあえず冷静になれ」

「・・・・はぃ」

「俺は高瀬心。こっちの俺にそっくりなのは双子の兄貴の・・」

「・・・・はぃ」

「・・おい。ちゃんときいてんのか？」

「・・・・はぃ」

「・・兄貴。こいつきいてねぇ」

高瀬心が、ローブを着た高瀬に振り向く。

兄貴と呼ばれた黒ローブの高瀬は、優雅という表現が世界一合うであろう微笑みを浮かべる。

「そうですか。まぁ、起きたばかりですから、無理もありませんよ」

そういうと、ローブを脱いだ。

ローブの下は、至って普通の白いTシャツにジーンズだった。

制服でない高瀬は、ローブを丁寧にたたんで置いてから、結衣に近づいた。

心とそっくりな、美しい顔が目の前に来る。

「・・ほぇ？」

「まだ目が覚めていませんね。・・失礼します」

Tシャツ姿となったほうの高瀬は、細く長い腕を伸ばし、誰が見ても綺麗というであろう手を、片方だけ結衣の顔を覆うように触れさせた。

結衣は、何をされているかも理解できないくらいにまだ朦朧としていた。

「力加減はしとけよ」

結衣の額に手を触れさせたままのTシャツ姿高瀬の横から、言ったのは神川。

「分かっていますよ」

Tシャツ高瀬はそれにっこりと笑顔を見せてから、結衣に向き直る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・はぃ？」

朦朧とした意識の中で、結衣は声を出す。

間髪いれず、目の前の高瀬はそれまで笑っていた表情を一気に引き締め、そして静かに唱えた。

「月に照らされ唄え」

結衣の頭を包み込むような淡い光が浮かぶ。

「居場所無き者よ」
強くなる光。
「蔑まれし姿を解き放て」

突然、光がはじけた。
結衣の視界がまぶしさでゆがむ。
「ぁっ・・・・！」

やがて光は弱く、淡くなっていく。
結衣の目も、正常な視界を取り戻した。
そのころには、さっきまで朦朧としていた意識もすっかりさめていた。

「目ぇ覚めたか」
そう言ったのは高瀬心の方だ。
「え。あっ・・・はい」
目の前で起きた、御伽話に出てくる、『魔法』のような現象を理解

することは出来ず、若干混乱は残っているが、さっきよりははるかに冷静になれていた。

目が覚めたら覚めたで、ここがどういうところなのか、が疑問として浮いてくる。
そして、この3人の男はどういうかかわりなのか。
なぜゲームセンターに入ったはずがここにいるのか。

大量の疑問がどっと沸き、今の結衣を漫画で表せば頭の周りにクエスチョンマークが飛び回っているような状態だった。

「ま、楽にしなよ嬢ちゃん」

そういってぽんぽんと座布団を叩くのは神川という男。

「自己紹介でもしとこうぜ。俺ぁ嬢ちゃんのことは何もしらねーからなぁ」

「は・・はい」

結衣はとりあえずその座布団に正座する。
そしてゆっくりと目の前の3人を見回した。

一人は、結衣を虐めから助けたクラスメイト、高瀬心。
一人は、神川・・と呼ばれている、結衣をここまで連れてきた男。
そしてもう一人は・・・・・？

「はい。はじめまして二宮さん。心の双子の兄の、高瀬時雨（しぐれ）と申します」

時雨と名乗った高瀬の兄は、実にさりげなく結衣に握手を求めた。
結衣は、差し出した相手の手を小さな手で軽く握り返す。

「で、俺が神川雫。ちなみに27歳。こいつらのいとこだ」

「神川さんは決して怪しい人ではございませんので、安心してくださいね」

神川雫の自己紹介後、微笑みを浮かべた時雨が言った。

「そうだ聞いてくれよ二宮ちゃん・・だっけ？
時雨ったらさぁ、ちっちぇー頃からずっと俺のこと『神川さん』って呼ぶんだよ。敬語だし。
いとこなのにさぁ」

「仕方ねーよ雫。兄貴はそういう性格なんだって」

「そう。時雨は品行方正なのに、心はこんな性格で・・・どういう変異だ」

「失礼だな。俺が性格悪いみたいだろうが」

「二人とも、二宮さんを放置しないように」

「あ、わりぃわりぃ」

3人は、かなり仲がいいようだった。
それぞれの性格の個性が調和し合って、綺麗に共鳴している。
そんな雰囲気を、結衣は感じた。

「あ・・・あの・・・・」

ふいに、結衣が口を開く。

「ん？」

神川の間の抜けた声がした。

「私・・二宮結衣といいます」

「お、結衣ちゃんか。よろしく！」

結衣の短い自己紹介に対して、明るい声で答える神川。

今まで結衣が苦手としてきたようなテンションの相手だが、嫌な気はしなかった。

むしろ、接しやすい、お兄ちゃんのような・・・・。

「それにしても二宮さん、申し訳ございませんね。驚かせてしまって・・・・。

神川さんの連れてき方も少し強引でしたし・・・・」

落ち着いた言葉遣いで言ったのは時雨。

「あ・・いえ・・・・」

時雨は、心の隣にいる。

結衣は二人の顔を見比べた。

本当に見分けがつかないほどそっくりだった。

「・・・そっくり」

正直な感想を述べる。

「ふふ、よく言われます。
心は、学校で悪さとかしてませんか？」

時雨は、心の兄というよりまるで親のようだ。

「あ・・いえ。大丈夫です」

悪さをしてるなんて有り得ない。
むしろ・・・・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5998d/

心の薬、お売りします。

2010年11月9日15時12分発行